校長室だより No.　３２ 平成 28 年 12 月 16 日(金)	強く　やさしく	六ツ美中部小学校校長 加　藤　嘉　一（かとう　よしかず）

「ここでマリオ！」　－１・６年の合同体育（ペア交流）長縄－

北から南へと向かう強い風が増えてきました。運動場で活動する子供の景色も変わっています。子供たちは、風の中、すでに３学期の縄跳びに向けて練習し始めています。マラソン大会が終わったところなのに。立派です。

１４日（水）の２時間目には、１の１と６の１が合同で長縄練習をしていました。１年生の後ろに立って、駆け出すタイミングを見計らい、背中をそっと押してあげる子、地面に８の字の道を書き、「ここでマリオ！」と言い跳ぶ場所と跳ぶ格好を教える６年生など。間違いなく、どちらの学年にも、体育として人として大きな学びがあります。次の時間には２組もペア学級で体育を行っていました。この学習を計画した１・６年の先生方に脱帽です。

授業が終わっても、そのまま一緒に練習する子供たちの姿がありました。

子育ての難しさ　－保育園の「せいかつはっぴょうかい」より２－

前号では、保育園の生活発表会でお母さん役を希望した男の子（お母さんが大好き）の話から、１６年程前に聞いた佐々木正美先生の講演（一部）を掲載しました。続きの話をもう少し裏面に紹介します。佐々木先生が当時携わっていた保育園の「ままごと」の第一人気（前号の「Ａ役」）は、「高級ペット役」でした。わたしはびっくりしました。と同時に恐ろしくなりました。

小学生は乳幼児期を過ぎていますので、ままごとの様子を観察することなどできません。が、社会生活である学校生活に子供が困難さを抱えるとき、この講演を聞いた頃から、「今この子にとって母性が必要なのか、父性が必要か」と考える視点をもつようになりました。もちろん対応する時に、小学生の低学年と高学年の子では使う言葉や接し方も変えますし、その子との関係を作り始めた時とそれ以降でも接し方は違ってきます。中学生であれば、中学生としてのプライドも考えてあげないといけませんし、みんなの前と個別の時との対応の違いも考えます。大切にしたいのは、その子の生きる強さを育むために、今何が必要かを考える視点をいくらももって考えてあげたい。今では脳の研究など

から、子供の様々な困難さは、子育てと全く別の要因がある場合もあるなど、科学的に明らかにされてきているので困難を極めますが。

社会も早い流れで変化しています。「社会が自己愛的になりました」の佐々木先生の言葉は、自分には痛烈でした。

子育ては、本当に難しい。みんなで、一緒に悩んでいきましょう。

《平成１２年１２月２５日　佐々木正美先生の講演より　講演メモ２》

子供たちは、無意識のうちに自分がその「A」になりたいという感情から「ままごと遊び」で「A 役」を選ぶように変わってきたようです。子供たちは大好きなお母さんに抱かれ愛されたい。しかし、抱かれるものが「A」に変わってしまったようです。

いつの頃からか、社会が自己愛的になりました。　　（ここまでは前号にも掲載）

（前号つづき）

乳幼児期に母性が与えられないと、３才頃から必要になってくる父性は上手に育ちません。私の見てきた子で、高校生になっても、お母さんに何時間も抱きかかえてもらわないと落ち着かない子供を見てきました。これが落ち着くまでに何年もかかります。乳幼児期に母性と父性が適切にバランスよく育たないと、その後育て直しをするには、何倍もの時間と苦労が必要になってきます。では、一人親家庭ではうまく育たないのかというと、全くそれは関係ありません。男女関係なく、その保護者が、母性と父性をバランスよく、必要なときに適切に与えていれば、愛にあふれた子供が育ちます。

近頃の大学生を見ていて、対人恐怖症の学生が多くなったことを感じます。わたしが勤める大学は、医者を目指す大学入試に合格をした学生たちですから、優秀でないわけがありません。その学生たちが、学内で何十m先から歩いてくるわたしに気がつくと、どうするか。すっと目をそらし、その後途中で道を変え遠回りをしていきます。自分で言うのもなんですが、わたしは学生に厳しく指導するタイプではありませんし、引き止めて学生の時間を邪魔することもしません。「おはようございます」「こんにちは」と言って通り過ぎればよいのに、それも避けていきます。わたしは、医者ですから表情を見ていればすぐわかります。

学生たちは、ゼミで卒論を書かなければなりませんが、卒論がなかなか書きだせず、大学を休みがちになる学生が出てきました。そんなときは、「大丈夫。書けなかったら最後にわたしが全部書いてあげるから心配しなくていいよ」と言うと、安心して書き始めます。こう言って本当にわたしが卒論を書いた学生など一人もいません。学生たちにもこうした様子の変化が出てきました。

わたしは、児童精神医学の勉強のために留学し、エリクソンの理論を学びました。そのときに教えていただいた先生から、「佐々木君、『信頼（trust）』の反対は何かわかるかね」と質問されました。当然反対言葉で考えれば、『不信（distrust）』かなと思いました。ところが、「いやいや不信（distrust）ではなく、引きこもり（確か英語はwithdrawal だったと思いますが自信がありません）なのだよ」とおっしゃられました。この話を聞いたのは、今から１０年以上も前のことです。すでにその頃に、今日本が抱える社会問題を言い当てていたことに驚くのです。……」

※この中に出てくる「A 役」の答えは、「高級ペット役」でした。

「高級ペット役」を望んだ子たちは、もう社会人になっている頃でしょうか。そして親に？